

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：34303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350846

研究課題名(和文)高齢者の歩行習慣とソーシャルキャピタル(SC)の関連：SC評価指標の作成と検証

研究課題名(英文)The relationship of the social capital to the neighborhood walking among community dwelling elderly- the evaluation indexes of social capital.

研究代表者

三宅 基子(MIYAKE, MOTOKO)

京都学園大学・健康医療学部・准教授

研究者番号：00631970

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：近年、ソーシャル・キャピタルは公衆衛生分野の研究において分析枠組みとして用いられることが多くなっている。本研究は、ソーシャル・キャピタルの概念整理と評価指標の検討を行い、ソーシャル・キャピタルと地域高齢者の歩行習慣との関連について検討を行った。本研究では、個人レベルのソーシャル・キャピタルである信頼感と帰属意識の評価指標を用いることとした。次に、それらの評価指標を用いて地域高齢者18,000名のデータから散歩行動との関連を検討したが、信頼感・帰属意識のソーシャル・キャピタルと歩行習慣との関連は認められなかった。

研究成果の概要(英文)：The social capital is used as the framework of the study in the field of public health in recent years. The aim of this study was to examine the relationship of social capital to neighborhood walking among elderly people in Kameoka city, Kyoto. The evaluation indexes of social capital were used trust, and civic engagement that was the social capital of the personal level in this study. Then this study examined the relationship of the social capital to neighborhood walking using data for 18,000 community dwelling elderly. The social capital as trust and civic engagement were no relationship with neighborhood walking among senior citizen.

研究分野：応用健康科学

キーワード：ソーシャル・キャピタル 地域高齢者 歩行習慣

研究者番号：

### 1. 研究開始当初の背景

1990年代頃から、ソーシャル・キャピタルは様々な研究領域で注目されてきていた。特に2000年代に入り、ソーシャル・キャピタルと健康に関する研究が行われ、健康に及ぼす社会的決定要因の解明に成果を上げてきている。一方で、健康寿命の延伸に高齢でも適度な運動が健康維持に有効であることも明らかになってきた。

そして地域高齢者の健康維持を主眼とした運動の実施に影響を及ぼす要因としてソーシャル・キャピタルが注目されはじめていたが、高齢者の歩行習慣に関連するソーシャル・キャピタルは明らかにされていない。

### 2. 研究の目的

本研究では高齢者の歩行習慣に関連するソーシャル・キャピタルを明らかにするために、ソーシャル・キャピタルの評価指標を検討するとともに、地域高齢者における歩行習慣の実態と歩行習慣に及ぼすソーシャル・キャピタルの影響を検討することとした。

### 3. 研究の方法

#### (1) ソーシャル・キャピタルの概念整理と評価指標に関する検討

ソーシャル・キャピタルは、経済学、社会学、政治学などの社会科学分野において用いられてきた概念であるが、ここ数十年間で経済学だけでなく、公衆衛生学の分野にも用いられ、健康の社会的決定要因の解明にソーシャル・キャピタルの概念が活用されている。

ソーシャル・キャピタルの概念は信頼、ネットワーク、互酬性、帰属意識などのキーワードで示されるとおり、非常にあいまいで多面性がある概念として知られている(稲葉他, 2014)。ソーシャル・キャピタルは多様な定義があり、また多面的側面を持っているため、定義自体が不明確であると多くの研究

者が指摘している。

そこで本研究ではソーシャル・キャピタル概念を整理し、調査に用いる評価指標の検討を行うことにした。

(2) 本研究では、高齢者の歩行習慣を「健康のために行う散歩」として捉えた。なぜなら散歩は欧米のウォーキングと同じ意味でとらえることができる(市村, 2004)ことから、高齢者にとっては、散歩や散策といった行為が、より一般的な歩行習慣と考えたからである。

そこで京都府亀岡市の地域高齢者を対象に大規模調査として実施された亀岡スタディのデータを用いて、地域高齢者の散歩の実態について分析を行った。

2011年~2012年にかけて、京都府亀岡市が65歳以上高齢者を対象に実施した日常生活圏域ニーズ調査(ベースライン調査)およびその後の追加健康調査(ベースライン調査)を分析データとした。

ベースライン調査は、2011年7月亀岡市内の65歳以上全高齢者19,372名(2011年4月1日現在)のうち、要介護3以上に認定されている者を除いた18,231名に自記式の調査票を自宅に郵送し、13,294名(有効回答率72.2%)から回答を得た。

ベースライン調査は、2012年2月ベースライン調査に回答を得た13,294名から、さらに要支援1,2および要介護1,2の軽度認定者1,356名を除き、二次予防対象者を含む11,938名に自記式の追加健康調査を郵送した。有効回答数は8,338名(有効回答率69.8%)であった。

ベースライン調査の調査項目は、日常生活圏域ニーズ調査として厚生労働省が推奨する89項目に市独自の15項目を加えた合計104項目であった。本研究では、市の独自項目として設定された、散歩に関する設問「健康のための散歩を行っていますか」を分析に

用いた。

散歩に関する設問に対して、「はい」と回答したものを散歩実施群、「いいえ」と回答したものを非実施群とし、散歩実施群と散歩非実施群別の性、年齢の基本属性および家族構成、現在の暮らし向きなどの生活環境。また趣味の有無、生きがい感の有無、主観的健康感の精神的健康度に関する項目を関連要因として分析に用いた。

最後に、個人レベルのソーシャル・キャピタル要因として、信頼感、帰属意識の項目を用いて散歩行動に及ぼす影響について分析を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 地域高齢者の散歩の実態と関連要因

本研究対象者全体の散歩実施率は 47.0%であった。性別では男性が 50.7%、女性が 43.9%で、男性の方が高値で有意差が認められた ( $P<0.001$ )。また年代別の散歩実施率は、70代が 48.8%で最も高く、以下 60代 46.5%、80代 44.0%、90代 35.6%で年代差が認められた ( $P<0.005$ )。なお対象者の平均年齢は、散歩実施群が男性  $73.1 \pm 5.8$  歳 (最高齢は 92 歳)、女性  $73.5 \pm 6.1$  歳 (最高齢 97 歳)。非実施群では、男性  $73.2 \pm 6.3$  歳 (最高齢は 97 歳)、女性  $73.9 \pm 6.5$  歳 (最高齢 98 歳)であった。

散歩実施群と非実施群で精神的健康関連項目を比較した結果、暮らしのゆとり感について、非実施群はやや苦しいが 42.5%で最も高く、次にややゆとりありが 29.4%を占めていた。一方、散歩実施群はやや苦しいが 45.7%、ややゆとりありが 30.7%と非実施群より高値であった。しかし苦しいと回答したのは散歩実施群で 16.4%であったが、非実施群が 20.5%と高値を示した ( $P<0.001$ )。

趣味の有無について、散歩実施群は趣味ありの回答が 86.5%で、非実施群の 79.3%より高い回答を示した ( $P<0.001$ )。

生きがい感の有無について、散歩実施群は生きがいありの回答が 91.5%で、非実施群の 85.1%より高い回答を示した ( $P<0.001$ )。

自覚的健康感は、散歩実施群でとても健康、まあまあ健康との回答が 79.9%であり、非実施群の 71.5%と比べて高値を示した ( $P<0.001$ )。

##### (2) ソーシャル・キャピタル研究の動向

実社会におけるソーシャル・キャピタルの有効性に着目したのがパットナムであり、ソーシャル・キャピタルとは「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワークおよびそこから生じる帰属意識と信頼性の規範」であり、「市民的道徳」とよばれてきたものと密接に関係している」と定義している(パットナム、柴内訳、2015)。

社会的ネットワークは、例えば市民の自発的な団体(例えば NPO やサッカークラブなど)において、その活動を通じて構成メンバーに「特定の信頼」が生まれ、さらにその信頼によって、社会全体の「一般的な信頼」を生み出すと考えられている(坪郷編、2015)。

そしてパットナムのソーシャル・キャピタルの類型は非常に重要であり、ソーシャル・キャピタルの多様な形式のあらゆる次元の中で、「橋渡し型」と「結束型」という 2 つの類型化である(パットナム、柴内訳、2015)。

次に OECD は、ウェルビーイングを測定する観点からソーシャル・キャピタルを捉え、自然資本、人的資本、経済資本、社会資本(ソーシャル・キャピタル)という 4 つの資本の持続可能性を視野に入れ、ソーシャル・キャピタルの指標化を行っている。つまり個人財としての社会的ネットワークと、公共財としての信頼および互酬性の規範である(坪郷編、2015)。

稲葉ら(2014)も同様に、ソーシャル・キャピタルを「私的財としてのソーシャル・キャピタル(個人間ないしは組織間のネットワ

ーク)」、「公共財としてのソーシャル・キャピタル(社会全般における信頼・規範)」、「クラブとしてのソーシャル・キャピタル(ある特定のグループ内における信頼・規範、互酬性を含む)」に類型化している。

このようなソーシャル・キャピタルの多様な捉え方があることから、本研究では歩行と関連するソーシャル・キャピタルとして、個人レベルのソーシャル・キャピタルに着目し、個人および一般的な信頼感と帰属意識を指標として分析を行うことにした。

### (3) 地域高齢者における散歩行動に影響を及ぼすソーシャル・キャピタル要因

散歩実施群・非実施群別のソーシャル・キャピタル要因との関連を分析した結果、世間一般の人々は信頼できるかという質問に対して、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の回答は、散歩実施群が77.5%で、非実施群の73.3%よりわずかに高値を示した( $P<0.001$ )。

近隣の人々への信頼できるかという質問に対して、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の回答は、散歩実施群が84.1%で、非実施群の80.5%より高値を示した( $P<0.001$ )。

住んでいる地区の一員であると感じますかという質問に対し、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の回答は、散歩実施群が94.0%で、非実施群の91.4%より高値を示した( $P<0.001$ )。

これらの3項目の散歩行動への影響について、回帰分析を行った結果、いずれの3項目も0.1以下の低い寄与率であった。3項目中で比較してみると、住んでいる地区の一員として感じる地域への帰属意識が、他の2要因と比べて最も高い関連( $\beta=0.035$ ,  $P=0.002$ )を示し、次いで世間一般の人々への信頼感( $\beta=0.029$ ,  $P=0.019$ )が統計的に有意であった。しかし近隣の人々への信頼感との関連は

認められなかった( $\beta=0.014$ , n.s.)。

### <引用文献>

市村操一, 近藤明彦:「散歩」という言葉のはじまりと明治時代の散歩者たち東京成徳大学研究紀要, 11, p91-102, 2004.

ロバート・D・パットナム(柴内康文訳): 孤独なボウリング-米国コミュニティの崩壊と再生, 柏書房, 2015.

坪郷實: ソーシャル・キャピタルの意義と射程. 坪郷實編 福祉+ 「ソーシャル・キャピタル」, ミネルヴァ書房, p1-17, 2015.

稲葉陽二他編: ソーシャル・キャピタルのフロンティア-その到達点と可能性, ミネルヴァ書房, 2014.

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

三宅基子, 渡邊裕也, 木村みさか: 地域高齢者における散歩行動に影響を及ぼすソーシャル・キャピタル要因に関する研究. レジャー・レクリエーション研究, 76, p5-13, 2015.

三宅基子: レジャー・レクリエーション分野におけるソーシャル・キャピタル研究の動向, Leisure & Recreation(自由時間研究), 41, p29-35, 2016.

[学会発表](計 5 件)

Miyake M, Kimura M: Association of Neighborhood Walking with Activity of Daily Living Disability in Healthy Older Adults. 66th GSA Annual Scientific Meeting, 2013, New Orleans, Louisiana.

Watanabe Y, Yamada Y, Miyake M, and

Kimura M, et al.: Comparison of class-style supervised intervention versus home-based unsupervised intervention in Preventing Sarcopenia The 2014 International Conference on Frailty and Sarcopenia Research, 2013, Barcelona, Spain.

Miyake M, Yamada Y, Kimura M: The Current Conditions of and Relationship of outing Behavior to Physical Function in Elderly. 67<sup>th</sup> GSA Annual Scientific Meeting, 2014, Washington, DC.

三宅基子, 渡邊裕也, 山田陽介, 木村みさか他: 地域高齢者の散歩行動に影響を及ぼすソーシャル・キャピタル要因に関する研究. 第74回日本公衆衛生学会総会, 2015年11月4日, 長崎

三宅基子, 渡邊裕也, 木村みさか: 地域高齢者における交流頻度とその関連要因. 日本レジャー・レクリエーション学会第45回学会大会, 2015年12月6日, 武庫川女子大学, 兵庫

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三宅 基子 (MIYAKE MOTOKO)

京都学園大学・健康医療学部 准教授

研究者番号: 00631970

### (2) 研究分担者

木村 みさか (KIMURA MISAKA)

京都学園大学・健康医療学部 教授

研究者番号: 90150573

渡邊 裕也 (WATANABE YUYA)

京都学園大学・健康医療学部 研究員

研究者番号: 706444376

### (3) 連携研究者

( )